本格・結婚殺人事件

辻真先

本格・結婚殺人事件

辻 真先

朝日ソノラマ

辻　真先（つじ・まさき）
1932年名古屋生まれ。草創期のテレビ制作演出を勤めたのち、揺籃期のアニメ脚本を多作し、劇画原作を書く。82年に「アリスの国の殺人」で日本推理作家協会賞受賞後は、小説とノンフィクションが多い。

本格・結婚殺人事件

発行日　1997年1月30日　第1刷発行

著　者　辻　真先

発行人　君島志郎

発行所　株式会社　朝日ソノラマ

東京都中央区銀座4-2-6
第2朝日ビル　(〒104)
振替　00120-6-40311
電話　03-3563-6021～3
印刷・製本　図書印刷株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社営業部宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
©Masaki Tuji 1997 Printed in Japan
ISBN4-257-79025-3

本格・結婚殺人事件

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

あとがき——6
第一部　入賞から選考へ——9
第二部　動機から捜査へ——131
第三部　脱稿から執筆へ——277
まえがき——340
真・あとがき——344

装幀　北見　隆

辻氏は「読者が犯人だ」とか「作者が犯人だ」といった小説は書いたが、「解説者が被害者だ」という小説はまだ書いていないのだ。解説を読んだ辻氏は、また例のにこにこ顔で、しめしめと言いながら、新たな趣向の小説を考えるかもしれない（いや、考えかねない人なのです）。

（『犯人』東京創元社刊　折原一氏の解説より）

ポテトとスーパーファン（中にはこういう有り難い読者だっているんです）の方に注釈しておきます。ふたりの結婚を熱望してくださる向きには、まことに恐縮なのですが、この作品を読むかぎりでは、どうも二十世紀中に彼と彼女が結婚するのは、むつかしいようです。（中略）いまの時点と二十一世紀の間を埋めるふたりの探偵ゲームは、また日をあらためてご紹介いたしましょう。

（『白雪姫の殺人』徳間書店刊　辻真先氏のあとがきより）

それにしても、私が五十年前、江戸川乱歩邸の土蔵を掻き回し、同じころ書かれたこの『江戸川乱歩の大推理』が、１９９４年から半世紀ぶりにまた刊行されるに当たって解説を書くというのも、まんざら資格のないことではあるまい。私、西堀小波 Nishihori Shopa をローマ字で並べ替えればSinpo Hirohisa いや違った、Ranposhihisho（乱歩氏秘書）になるのだから。え、Ｉがひとつあまるって？

（『江戸川乱歩の大推理』光文社刊　西堀小波氏の解説より）

あとがき

ずいぶん時間がかかってしまいました。読者のみなさんに自信作の上梓をお約束したのは、たしか去年の初夏なのに、いまは九月ももう十九日。道南のこのホテルに肌寒い風が吹きはじめています。

おやおや、一年以上もかかったのか。

辛抱強く待っていてくださった読者には、なんともお詫びの言葉がありません。

はてな。だれかがどこかでなにかいっていますよ。

「待っていたのは読者だけじゃないぞ」

声に聞き覚えがあります。わかりました、〝ざ・みすてり〟の青野編集長でしょう。ああ、だめだめ。隠れたってお尻が見えているんだから。

冗談でなく、青野さんにもご迷惑をかけっ放しでした。ノーベル賞クラスの大作家ならともかく、吹けば飛ぶような三文作家、とりえといえば酒に強いだけ。飲ーめる賞クラスのぼくの原稿を、よくぞ待っていてくださった。感謝に堪えません。

解説を買って出てくださった、評論界の巨星である西堀小波先生にも、この機会にありがとうと申し上げておきます。ぼくのこのささやかなミステリー――というのはむろん謙遜で内心は傑作と自負しているのですが――が、多少なりとも版元文英社の売り上げに貢献できたとしたら、それは拙作に箔をつけてくださった、西堀先生のネームバリューによるものです。

この本を売ってくれた書店のみなさんにも、その書店へ配本してくれた取次のコンピューターさんにも、感謝あるのみです。書店の店舗数は全国で二万とも二万五千とも聞いていますが、その中でぼくの本を置いてくださるのはごく一部にすぎません（目のない奴らばっかり――というのは内緒ですけど）。今日ほそぼそとながら作家の看板をあげていられるのは、ひとえにみなさん方のおかげなのです。

いや、それをいうなら、なにはさておいてもお礼言上の必要があるのは、読者のあなたに対してでしょう。

本来ならおひとり毎に手をにぎって、よくぞ買ってくだすったありがとうと、涙をうかべて手を摑み、なにがしかのリベートを進呈すべきなのですが、残念ながら私もそれほど暇ではないので、横着して紙上の活字で代用させていただきます。

お礼代わりに、今後いっそうレベルアップした、ぼくならではのミステリーを書きまくって大勢をたつ、３０ち３７９０―と、つぷてい、すねそきこ　ぱらぷ、ぴすきめす

しょうちょう　象徴　しょんちうっはてめいきけいすき

推理作家文月みちや氏殺される

タレントとしても著名であった文月みちや氏（35）が、長編を執筆中だった北海道ウトナイのオズマホテルで9月20日早朝、遺体となって発見された。後頭部にうけた傷が致命傷で、所轄警察署では殺人の疑いで捜査中。

推理小説研究家　鮎鮫竜馬氏談「文月さんとはつい先日〝ざ・みすてり〟大賞の選考でごいっしょしたばかりなので、驚いています。テレビ出演から小説まで、多才だった氏の急死は惜しみてもあまりあるものです」

（〝夕刊サン〟より）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一部　入賞から選考へ

1

その五日前の深夜である。

新宿ゴールデン街にある〝蟻巣(ありす)〟という古ぼけたスナックから、時ならぬバンザイの声がひびいた。

「牧薩次万歳」

威勢よく音頭をとったのは、夕刊サンのデスクをつとめる可能克郎だ。年功序列でデスクになっているものの、気のいい世話好きな性格はヒラの記者時代と少しも変わらない。変化といえば、ベルトの穴がふたつ右へ移動したことと、頭のてっぺんの地肌が透けて見えるようになったことぐらいだ。

「万歳……万歳！」

ご丁寧に克郎は三唱した。いつものママならこのへんで唇に指をあてて壁を指さすはずである。

「この壁、うすいのよ……耳をあてるとみんな聞こえてしまうくらい。お隣にわるいから静かにしましょうね」

だが、今日に限ってママはにこにこするばかりだ。よくよくめでたいことがあったとみえる。

「おめでとう、ポテト」

薩次の隣から、克郎の妹のキリコがカクテルグラスを突き出した。淡いピンクの液体がかすかに揺れている。薩次とキリコは、中学以来の親友だ。いや、恋人といっていいのだが、なぜかまだ結婚に

踏み切らず、克郎をやきもきさせていた。
陽気なキリコと対照的に、しみじみとした口調でママがいった。
「よかったわ……」
ママの近江由布子はもと女優だけに、年をとっても顔の造作がはっきりしている。それが特徴の大きな目を見開いて、薩次に笑いかけた。
「あなたならいつかきっとと、思ってた」
「むしろ遅すぎた受賞というべきだよ」
カウンターの隅から、中込がそっとグラスを掲げてくれた。見るからににこやかな中年紳士だが、目つきが案外鋭いのは、広告代理店放洋社のやり手プロデューサーという、生き馬の目を抜く職業のせいかもしれない。ただし彼は、〝蟻巣〟の客ではない。由布子ママのれっきとした旦那で、一時放洋社をやめていたころは髪結いの亭主を称して皿洗いを志願、ひと晩に半ダース割った記録を持つ。
「第一回の入選者に牧さんを選んだことで、文英社も格を上げましたな」
「こら、少しは嬉しそうな顔をしなさい」
キリコはじれったそうにボーイフレンドをせっついたが、当の牧薩次は、茫洋とした表情で生返事した。
「ああ……まあね……ありがとう」
栄えある大賞受賞者とは思えない反応だが、キリコにいわせれば、そこが彼らしいのだ。もっとも本人にしてみると、まだ実感が湧かないというところか。
つい十分前、薩次が来店する直前の〝蟻巣〟に、文英社から電話がかかってきた。

かけてきたのは、看板雑誌〝ざ・みすてり〟の編集長青野庄伍だった。
電話に出た由布子に、彼はせかせかといった。
「牧先生、きてますか」
薩次はあまり飲める口ではないが、〝蟻巣〟の常連客のひとりだったし、青野をはじめとして文英社のスタッフもこの店によく出入りしていた。オーナー夫婦がそろってマスコミの関係者なので、出版や映像関係の客が多いのだ。
「いえ、まだ……」
由布子が答えると、店にはいってきたばかりのキリコが教えた。
「ポテトならもうすぐくるわ。デートの約束なの」
ポテトというのは、中学以来の薩次のニックネームだ。一目彼を見た者なら、あだ名の由来は聞かなくても理解できるだろう。まるっこい顔に、細い目と大きな鼻、ぶあつい唇が大雑把にならんでいる。月面のクレーターみたいに顔をにぎわしていたニキビの跡は、三十歳をすぎてからはさすがに目立たなくなったが、全体の印象は依然として、畑から収穫直後のジャガイモであった。スマートといいにくい体型に、できあいのジャケットをひっかけ、おなかのあたりでいつも八の字にひらいている。お世辞にも身だしなみのいい男ではないが、これでもポテトこと牧薩次は、小説で飯を食っているのだ。
彼が職業として推理作家を選んでから、もう十数年たつ。はじめて彼のミステリーが活字になったのはまだ中学時代だったから、スタートはきわめて快調であったが、大学を終え本腰をいれて作家になってからは、必ずしも順調といえなかった。キリコにいわせると、「ハッタリが足りない」作風で

損をしているらしい。ろくに酒も飲めず、タバコはまったく吸ったことがない。ギャンブル、スポーツみんなダメときては、人づきあいだって良いわけがない。

だがキリコは信じていた。(見ている人は、ちゃんと見てくれてるよ)

青野の電話が、彼女の信念を証明した。

彼はこういったのだ。

「牧先生がいらしたら、伝えてくれませんか。〝ざ・みすてり〟大賞受賞者が、先生にきまったって」

「えっ、ホントですか!」

青野の声を耳にして、キリコが受話器をひったくったときは、もう電話は切れていた。

「せっかちなんだから、あの編集長は!」

口をとがらせるキリコに、由布子が尋ねた。

「〝ざ・みすてり〟大賞って、前からあったかしら」

「今年できたばかりなんだ」と、中込が説明役をひきうけてくれた。

「文英社では、乱歩賞に匹敵する権威あるミステリー界の賞に育てるつもりらしいね……その第一回受賞というのは、めでたいじゃないか」

「きゃあ」

だしぬけにキリコがカン高い声を放ったから、隣の椅子で丸くなっていた猫が、びっくりしたように床へ飛び下りた。この店の主(あるじ)といっていいチェシャだ。

「ママ、カクテル頂戴。マティーニ……ううん、ピンクレディでなきゃいけないんだ」

「珍しいものをオーダーするのね」

由布子がふしぎがった。ピンクレディはジンベースのカクテルで、外見よりずっとタフなアルコール飲料だが、キリコが注文するのははじめてのことだ。

「へへ」どういうものか、彼女に稀な照れっぷりを見せた。

「あのね。ポテトがきても黙っててね」

「いいけど、なにを内緒にするの」

「うん……」

もじもじしてから、顔をあげた。

「エイいっちまえ。ポテトがいつか話してくれたの。彼、ミステリーで食ってゆく自信がないんだって……だから、結婚がいいだせないんだって。なにかひとつ賞をとって、この道でやってゆく決心がついたときに、私に、つまり……ですね」

「プロポーズするって？」

「はい」

「まあ」

由布子と中込が笑顔を見交わした。

「じゃあ、今夜はもしかしたら」

「二重にめでたい晩になるかな？」

「えへへ。そうあってほしいものでやんす」

肩をすくめたキリコの前に、ほのかな薄紅色で満たされたグラスが、滑り出た。

「お待たせ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com